遺跡の環境整備に関する実証的研究 Ⅱ

—— 大阪府百済寺跡の公園整備と住民意識の変化 ——

近 藤 公 夫

A Practical Study on a arrangement of historic spot Ⅱ

Relations of the construction of Historic Park “Kudaradera
Old Temple” and changes of inhabitant's feelings ——

By Kimio KONDO

序言

遺跡の環境整備がもつ意義において、ひとつの課題は「その整備が住民の遺跡に対する理解を如何に深め、その保全に積極的な参加をもつ意欲を如何に高めるか」に求められる。さきに本報告第1報で、筆者は遺跡の公園化に関する住民意識を調査し、その学歴別、住居位置別居住経験別分析を試みたが、ここではそれから上記課題の解明を意図した。すなわち、史跡公園に隣接する市立小学校の保護者全数調査により、約870の回答を得たがその約26%は公園整備を未知なので、これから可能な公園化の既知層との意識比較を含む分析が、この発表の内容である。

また調査の信頼度は精度を10%、すなわち有効数字を1桁として95%とみなされ得る。終りに、調査の項目のうちこの分析でとりあげた問題は、学歴と公園化の既知度、公園化の意義の評価、公園の利用に関する頻度と目的、史跡の保全方向とその程度に関する意識、の8項目で、調査結果は約7,000型に分析された。

そしてこの型別で、調査結果が1%以上分布するとみなし得た型は88型であり、学歴と利用頻度を除外した384型について同じく1%以上の分布を決定し得た型は52型であった。以下、調査結果を2項相関分析および3項以上の相関分析にわけて説明する。

解析結果について(1)

ここでは2項の相関解析結果を説明する。

i 学歴と公園化の既知度など

学歴と諸問題の関連は前報の示した通り、保全方向の意見に強い相関が、環境整備の評価や利用における見学目的や保全の強化という意識に弱い相関があることを結論し得るが詳述を避ける。

ii 公園の既知度と整備の価値評価など

史跡公園の既知者は遺跡整備の価値に関して肯定するものが85%弱、否定するものが5%強、未知者で同じく30%強と5%弱で、他は評価不明で10%と65%程度を算

した。

遺跡を話題にした経験の有無については、既知者で85%弱まで肯定し、未知者で5%弱の有経験があつただけ史跡公園の利用頻度に対して既知者は年40回水準が約15%と年10回級約65%、未知者は年10回か不明かである。

また利用目的については、既知者の見学類似目的30%強と休息目的の約60%に対して、未知者は約10%の見学類似目的がある以外に回答がなく、回答者も公園を将来に訪れるならばこの目的でという仮定の回答であつた。

保全程度の意識については、既知者で保全の強化が約30%、現状の肯定が45%強であり、未知者では強化が15%強、肯定が10%強、終りに保全方向の意見については既知者が史跡公園化を約60%、休養開発を35%弱回答し未知者が同じく55%強と15%弱、また10%弱の保全否定が回答された。

遺跡への関心の別面であるその話題化と上記諸問題の関係は、話題経験者で遺跡整備の価値の肯定80%強、否定10%弱、非経験者で同じく60%弱と5%弱、他は不明であつた。

史跡公園の利用頻度は、話題経験者で年40回水準20%強、年10回級約15%、非経験者は同じく5%弱、30%弱他は0回ないし不明で、その利用目的は、前者で見学類似目的が約30%、休息目的65%弱、後者が同じく20%弱と約25%、他は不明であつた。

保全程度については、話題経験者で保全の強化が約30%、現状の肯定が45%弱、非経験者が同じく約20%と25%強であり、終りに保全の方向の意見は、前者で史跡公園化が20%強、休養開発が25%弱、後者で同じく55%強と約25%、約5%の保全否定を含む後者の不明は約20%で、前者の4倍である。

以上、この解析も諸問題との相関は高い。

iii 整備の価値の評価と利用実態など

遺跡の整備については肯定・否定および不明という3評価が見られ、肯定が総回答の約70%、否定が5%強で各々つぎの傾向をもつ。利用頻度は年40回水準約15%、年10回級約75%を肯定者に、同じく約15%と40%強を否定者に、同じく各々約5%を不明回答者に見、その目的

表4 百済寺史跡公園に関する住民調査の分析結果
(2項・1項相関分析)

分析基準	E	G	J	L	P	S	構成比率
E、G	10	10	7	1	3	6	62
F、I	0	0	0	0	1	5	15
E、J	10	8	10	1	3	6	52
F、K	0	3	0	0	1	5	24
E、P	10	8	7	1	10	7	25
E、R	10	6	6	0	0	4	16
F、R	0	3	0	0	0	4	19
E、S	10	9	9	2	4	10	45
F、V+W	0	1	0	0	0	0	7
G、L+M	9	10	6	4	6	8	23
H+I、O	2	0	1	0	1	5	21
G、S	9	10	7	2	3	10	47
H+I、U	8	0	6	0	1	0	10
J、L+M	9	9	10	5	3	6	17
K、O	2	3	0	0	1	4	26
J、P	10	8	10	1	10	8	17
K、Q	8	6	0	2	0	6	11
J、S	10	7	10	2	4	10	33
K、S	4	4	0	1	3	10	26
K、U	7	7	0	0	2	0	12
L+M、S	9	9	8	4	5	10	21
N、S	10	10	7	0	4	10	27
N、U	10	7	7	0	2	0	15
O、S	0	3	0	0	2	10	11

表3 百済寺史跡公園に関する住民調査の分析結果 (1項・1項相関分析)

	A	B	C	E	F	G	H	I	J	K	X	Y	Z	L	M	N	O	P	Q	R
S	6	5	5	6	5	7	3	5	7	6	5	7	4	10	7	6	4	8	7	3
T	1	1	1	1	0	1	3	0	1	0	2	1	0	0	1	1	1	1	1	0
U	2	3	3	2	2	2	5	2	2	2	3	2	3	0	2	3	2	1	2	4
V、W	1	1	1	1	3	0	1	3	0	2	0	0	3	0	0	0	3	0	0	3
P	3	3	2	3	1	3	3	1	4	2	8	3	1	7	4	3	1			
Q	4	4	3	5	1	5	3	1	5	3	2	5	2	3	4	4	2			
R	3	3	5	2	8	2	4	8	1	5	0	2	7	0	2	3	7			
L	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0							
M	3	2	1	3	1	2	3	1	2	2	3	2	1							
N	3	4	5	5	0	6	3	1	6	2	6	7	1							
O	3	3	3	1	8	1	4	8	1	5	0	0	8							
X	1	1	1	2	0	1	1	1	2	1										
Y	5	5	6	6	0	7	4	1	7	3										
Z	4	4	3	2	10	2	5	8	1	6										
J	6	5	5	7	1	5	7	6												
K	4	5	5	3	9	5	3	4												
G	7	7	6	8	5															
H	1	1	1	1	1															
I	2	2	3	1	4															
E	7	7	7																	
F	3	3	3																	

表3「備考」

各略号は表1・2を参照すること。

各数値は縦列十分比を示す。

なお、XYZは各々利用回数で年40回、年10回及び0回と不明を示す。

表4「備考」

各略号は表1・2を参照すること。

各数値は構成比率のみ百分比、その他は十分比とする。

なお、ここでは2項・1項相関分析の特長的なものをえらんで、表示したから、構成比率の各和は必ずしも100にならない。

頻度不明のもので約45%と約30%である。

これに対して、利用目的からする検討については、上述の見学類似目的を見学と準見学に分類しつぎのように解析される。

まず保全程度については、見学層で保全強化が約25%現状肯定が約75%であり、準見学層では同じく45%弱と35%弱、休息目的では同じく約30%と45%弱で、不明層は各々約10と15%弱であった。

また利用目的と保全方向との関係は、見学層で全数が史跡公園化、準見学層で史跡公園化が65%強、休養開発との併存や休養開発が各々約15%、休息目的では各方向が約60%、5%弱、約35%、不明層で各々が40%弱、5%弱、30%弱で、休養開発希望増が著しい。

以上の利用実態と意識との関係からは、利用目的と遺跡保全の方向意識に相関が著しい。

これは保全程度と方向における、保全強化層の史跡公園化約75%、併存開発10%弱、休養開発15%強、現保全肯定の同じく65%強、10%弱、約25%、不明の同じく40%弱、0%、35%強という関係と同程度の相関でもある。

V 2項相関解析の総括

以上の分析を通じてつぎの総括を得る。

学歴を基準とする分析では保全方向に関して、高学歴ほど史跡公園化の主張が強いけれども、大勢は著しい相関性を示さない。

既知度を規準とする分析は整備価値評価、話題関心、保全の程度や方向に関する意識についての高低で数倍の著差があり、利用実態にも差異が大きいことは後述の通りである。

話題関心に関する分析は価値評価について相関性はやや低い、保全に関する意識や利用実態では既知度による分析と同じく、不関心に多い不明の回答を含み、大きい差異がある。

既知度や関心と同様、その認識に関する問題である整備の肯定否定と他の問題の間には、利用目的・保全方向の両者に相関がある。

他方、利用実態と意識に関する問題では、利用頻度と保全程度や利用目的と保全方向に相関のあること等がその主なものである。

以上を既括すると、史跡公園化の既知度と話題関心の有無と保全方向の3者による分析により、問題の傾向は最も明確になると思われる。

また、以上の結果は調査した問題各個の相関を物語る、特に既知度と話題関心の如何による差異は、史跡公園の設定が市民のこの問題に対する興味誘発を物語ると思われる。

すなわち、既知・関心層は全数の過半であるが整備の

肯定80%強で、その半数である未知不関心層の整備肯定30%強と著差があり、利用目的の見学類似目的は既知関心層の30%強、既知不関心層のほぼ25%、未知層の同じく約10%や、保全の程度の強化が各々35%弱、約25%、10%強、保全方向の史跡公園が同様にして65%ないし50%となる等が窺はれよう。

これは上述した相関分析の意義を裏づけ、2項の相関分析から多項のそれを発想させる。

ここでは既知度や関心などの有意差の著しい6項目で特に傾向の明らかな10関係の2項相関分析から、つぎの多項分析が提案される。

既知度・関心度を基準とするもの
既知度・評価度を基準とするもの
既知度・保全程度を基準とするもの
既知度・保全方向を基準とするもの
関心度・利用目的を基準とするもの
関心度・保全程度を基準とするもの
関心度・保全方向を基準とするもの
評価度・利用目的を基準とするもの
評価度・保全方向を基準とするもの
利用目的・保全方向を基準とするもの

なお、この研究において最も興味をもたれた史跡公園整備の既知と未知による意識の差は、既知層を基準としてつぎの通りである。

- a 環境整備の肯定者は3倍余りに増大し、評価不明は約7分の1に減ずる。
- b 遺跡を話題にする関心は20倍増する。
- c 利用実態は頻度に著差があり、その目的も見学類似目的が3倍余りに増大し、不明のものは約10分の1となる。
- d 保全程度では保全強化の主張が2倍増し、不明層は約3分の1に減少する。
- e 整備の方向に関しては不明ないし保全の否定が6分の1程度に減少する。

すなわち、遺跡環境の公園化という事態はその事業の認識を深め、遺跡への関心を深めて、見学や休養の利用を促し、遺跡の保全強化という世論を高め、保全の方向に緑地化等という明確な概念を与えると判断される。

この諸問題との相関性は多くが学歴と諸問題との相関性より高く、史跡公園との接触がもたらす影響の大きさを物語る。

解析結果について(2)

多項の相関解析はまず3項の相関解析、つぎに4項以上のそれを試みる。

i 公園化の既知度・史跡関心度について

この分析は前述した所であつて、詳述は避けるが整備

の肯定否定及び利用目的や保全程度に相関がある。

ii 公園化の既知度・整備評価について

この分析は、既知肯定という総数の62%の層以下、既知否定6%、既知不明7%、未知肯定9%、未知不明16%の各層を基準とする。

既知肯定層は関心が約70%、既知否定層は85%弱、既知不明者は60%強、未知肯定層は10%強、未知不明層は5%強で、その分析の有意性は関心度のそれと同程度と予想される。

まず利用目的との関係は、見学類似目的が上述の各層において約30%、15%強、15%弱、30%強、および0%であつて、休養目的の同じく65%弱、約50%、約30%、0%および5%強と併考し有意差が見られる。

保全程度とは、上述の各層別に保全強化が30%強、35%弱、15%弱、10%強、10%強、現状肯定の45%強、35%弱、30%弱、30%弱、10%強という数値と共に強い相関を示す。

終りに保全方向との関係は、同様に史跡公園化を中心とするものが70%弱、0%、30%弱、65%強、および45%弱であり、相関が強い。

iii 公園化の既知度・保全方向について

これは既知・史跡公園化の全数中50%、既知休養開発の22%、未知・史跡公園化の14%、未知・休養開発の4%を基準の分析である。

まず関心性との関係は、既知・史跡公園化層の話題化75%弱以下、同休養開発層65%弱未知例の各々5%強と0%、整備肯定とは95%強、65%弱、40%強、約50%である。

つぎに利用目的との関係は見学類似目的において上述各層が45%強、15%弱、約20%、0%であり、保全程度については強化の提案が各々35%弱、約20%、20%強、0%となる。すなわちこの分析では、関心・評価・利用目的・保全程度に対する諸問題それぞれに相関があり、この種の傾向は既知度と保全程度の関係にもつぎのように見られる。

iv 公園化の既知度・保全程度について

この分類基準における構成は、既知保全強化層23%、既知現状肯定層33%、既知不明層20%、未知不明層18%を主要なものとする。関心度としての話題経験は各々70%強、約70%、約65%、および0%で既知未知の差があり、整備評価の肯定に関する90%弱、85%強、約70%、および35%弱も同様である。

利用目的では見学類似目的において40%弱、20%弱、約15%、および0%であり、保全方向については史跡公園化を中心として87%強、約75%、約30%、および45%弱であり、両者の混合した影響が考えられる。

v 史跡公園への関心・利用目的について

この基準の構成は関心見学類似目的16%、関心休養目的32%、不関心不明26%が主要なもので、諸問題との関連はつぎの通りである。既知度については各々95%弱、全数および約15%で、関心層と既知層が合致し、整備肯定も各々約90%、85%強、約30%である。

保全程度についてはその強化が各々45%弱、約30%、10%弱で強い相関があり、保全方向に対しても史跡公園化の方向について各々約95%、70%弱および45%弱と相関が強い。

vi 史跡公園への関心・保全程度について

この基準における構成は関心保全強化層が17%、関心現状肯定層が24%、不関心保全強化層が9%、不関心現状肯定層が14%である。既知度との関係は各々全数、95%強、65%強および80%弱、整備の評価では肯定が80%弱、95%強、65%強、60%弱で相関は低い。利用目的では見学類似目的において各々60%強、約50%、35%弱、約20%で関心度にやや偏した相関があり、保全方向では史跡公園化を中心とするものが各々90%弱、85%強、80%弱、60%強あつて相関は強くない。

vii 史跡公園への関心・保全方向について

ここでの構成は関心史跡公園化層が37%、関心休養開発層が14%、不関心史跡公園化層27%、不関心休養開発層12%である。

関心史跡公園化層以下の各層と既知度との関係は各々95%強、全数、50%強および65%強であり、整備評価の肯定は各々90%強、75%弱、60%強および65%強で相関は低い。

また利用目的に関しては見学類似目的が各々約40%、約10%、20%強、20%弱で相関が強く、保全程度でも保全強化が各々約40%、約15%、30%弱、15%強と同様である。

viii 史跡整備の評価・利用目的について

この基準の構成は肯定見学類似目的層23%、肯定休養目的層39%、否定不明休養類似目的層11%が主要なものである。

既知度との関係を見ると、85%強、全数および70%強関心度との関係では約65%、70%強および約55%で何れも相関は低い。

また、保全程度に対しては30%強、25%強、約35%の保全強化を各層に求め得、保全方向としては史跡公園化を各々約70%、75%弱、20%強と求め得るので、最後の問題についてのみ強い相関が見られると結論される。

ix 史跡整備の評価・保全方向について

この基準は肯定史跡公園化52%、肯定休養開発16%と否定不明史跡公園化12%である。その既知度との関係は各々90%、85%強および35%弱、関心度との関係は各々70%弱、約50%および約25%で相関が強い。

また利用目的に対しては見学類似目が40%弱、約20%および約25%、保全程度に関しては保全強化が約35%、約20%および35%弱であり、なお否定不明層の休養開発を介するものは全数の7%で既知度約70%、関心度40%強、見学類似目の0%、保全強化約15%で特異な傾向を示す。

x 利用目的・保全の程度について

この基準の構成は見学類似目的史跡公園化層の20%、休養目的史跡公園化層の27%、同目的休養開発層の17%目的不明史跡公園化層11%を主とし、まず既知度との関係では各々約80%、全数、約60%、0%、関心度は約65%、約70%、95%弱と0%で目的不明層の傾向が注目される。

整備の評価については肯定するものが各々約90%、全数、約65%、30%弱でやや相関が見られ、保全程度に対しては約40%、35%、強、30%弱および20%弱で同様である。

xi 2項基準による3項分析の総括

以上は2項を基準として考えられる他項との相関の主要なもので、各相関分析の10基準項目の高い相関がある例から40型を検討したがその総括は以下の通りである。

これは本来前節でとりあげた8調査項目から得られる168型のくみあわせに対して4分の1弱であるが、さきの相関分析で傾向の有意性が最もよく認められたものの検討である。その結果を見ると、既知度については評価と保全方向の型が強い相関をもち、関心度でも同基準の相関が強く、環境整備の評価では保全方向に関する基準以外は相関が強いが、既知度・関心度における型が最も有意である。

また利用目的は全て相関が強く、特に関心度と保全方向の型が有意で、保全程度では既知度と保全方向や評価を利用目的に関する以外、特に関心度と利用目的の型が有意である。終りに保全方向は上記多くの型、特に関心度・保全程度に関する型の分析に有意性が高い。

これを通じて既知度を中心とする分析は相関の高いものが最も多く、保全程度の意識のそれが少なく、また、相関の最も強いものが多いのは保全方向と関心度を中心とする分析とみなし得、史跡公園造成の既知未知はこの種の問題の意識や行為実態に最も著しい影響を与えているところであり、漠然とした常識的意識である保全程度の観念は他の意識や行為に強い関係をもたれない、と結論される。

しかしながら、個々の問題に対して特に強い相関をもつ基準としては、既知未知以後の問題である関心度などの基準があげられ、ここに多項相関分析の本来の意義が指摘される。

xii その他の多項相関分析について

以上、この論文では1項基準の1項分析と2項基準の1項分析をあげた。

つぎの段階の分析に考えられるのは3項基準の1項分析、この論文で可能性のあるものは280型、と2項基準の2項分析、同じく420型で、更に分析は3項基準等に及ぶであろう。

前者は関心が強く公園を見学に利用して史跡保全の強化という意識をもつような階層の既知度や評価や史跡保全方向の意識を考えるもの、後者は史跡公園を既知で保全の強化を意識する階層が整備を肯定し史跡の公園化という主張をもつ傾向を知る等を意味する。

上述のようにこの分析は極めて多数型があるので、ここでは上記の2例を検討するとともに以後の分析は他の機会にゆずる。

関心度・利用目的・保全方向を基準とする分析の基準構成は、関心見学史跡公園化16%、関心休養史跡公園21%、関心休養休養開発10%、不関心不明史跡公園化11%等である。

各項の既知度は95%弱、全数、全数、0%であり、その評価は肯定が90%弱、全数、約60%、30%弱であり、保全程度では強化が約45%、40%弱、約20%、20%弱であり、評価と保全程度に関して有意の相関が見られる。

既知・保全程度を基準とするものは既知保全強化の23%、既知現状肯定の31%、既知不明の19%、未知不明の18%を主とする。

各項の関心・目的との関係は関心見学に各々30%強、30%弱、約5%、0%であり、関心・方向との関係は関心史跡公園化に75%弱、60%強、10%強、0%、評価を中心としては評価と利用目的における肯定見学をとれば各々25%強、約35%、5%強、5%強であり、評価と保全方向の肯定史跡公園化は各々65%弱、65%強、25%弱15%強であり、終りに利用目的保全方向に見学史跡公園化をとれば、40%強、40%弱、5%強、5%強となる。

以上の4項目以上に関係する分析にあつては全体を総括する結論を得るに至らないが、問題により異なる相関は有意に認められる。しかし既述したように単に8調査項目につき分析を志すこの論文にあつても、相関分析の全てをとげるには上述した多数型の2項相関から8項相関までのくりかえしにより、人間能力をこえる分析が要求される。

すなわち、1項基準の分析は、C₂をはじめとして約1500型、2項基準約7500型、3項基準以上約100型として求められ、これは将来に予想される電子計算機を通じての分析に期待せざるを得ない問題であろう。

結語

従来この種の質問調査は造園学に関しても利用実態や

その意識などの問題を研究する手段として多くの例があるが、その集計分析では単純集計や分析に終るものが多く、この研究の相関分析の例は従来見られなかつた。

この発表はさきに第1報が利用実態や認識と問題意識の傾向を学識や居住条件から検討したのに対し、問題相互間の分析を試みる。

その結果、つぎのくみあわせに強い相関のあることが現在まで明らかになった。

学歴と史跡の保全方向の関係。

史跡公園の接触経験と整備評価・話題関心・保全程度・保全方向および利用実態の関係。

整備の肯定・否定と利用目的・保全方向。

史跡公園を話題とした関心と保全程度や保全方向および利用実態の関係。

利用頻度と保全程度・利用目的と保全方向。

以上の各1項間の分析結果として注目されるのは、史跡環境整備の既知と未知の間における意識や利用実態の差異であり、そこに史跡環境整備の積極的意味が考えられる。

他方、各項の相関分析は各1項間以外多項1項間や多項多項間にも考えられ、約1万に及ぶくみあわせ全ての検討は困難であるが、2項1項間の分析からつぎの検討を得た。

整備評価と保全方向の複合基準により史跡整備の既知度や関心度が分析され得ること。同じ既知度と関心度の基準が史跡整備の評価と強い相関をもつこと。

関心度と保全方向の基準が利用目的と、関心度と利用目的が保全程度と、関心度と保全程度が保全方向と各々相関すること。

Summary

This study is an analyse on relations of the construction of a historic park and inhabitants' feelings.

These are the knowledge on historic park, its valuation, interests on it, inhabitant's educational condition, using frequencies, using purposes, the level of conservation and the conservation types, as mentioned in first report.

In this study above interview's results are relatively analysed, as a relation of the knowledge of historic park and the irvaluation etc. or a relation of knowledge valuation complex and their interest etc.

As results, inteviews' answers are analysed in about 10,000 types, and the total of above analysing relations are accounted about 10,000 patterns.

At present, following conclutions are resulted, as

to have clear relations.

- a) educational conditions and proposes of conservation types,
- b) knowledges on park and every replys,
- c) valuations of parklike arrangement of historic spot and using purposes and proposes of conservation types,
- d) interests on historic spot and proposes of conservation levels and types, and using purposes,
- e) using frequencies and conservation levels' proposes,
- f) using purposes and conservation types' proposes,
- g) valuations conservation types complex and knowledges and interests,
- h) knowledges-intrests complex and valuations,
- i) interests-coservation types complex and using purposes,
- j) interest-using purposes complex and conservation levels,
- k) interest-conservation levels complex and conservation types,

Because of great mass of analysis patterns as about ten thousands, further problems will not be able to studied without computer, even in this simple study.

(42. 8. 10受付)